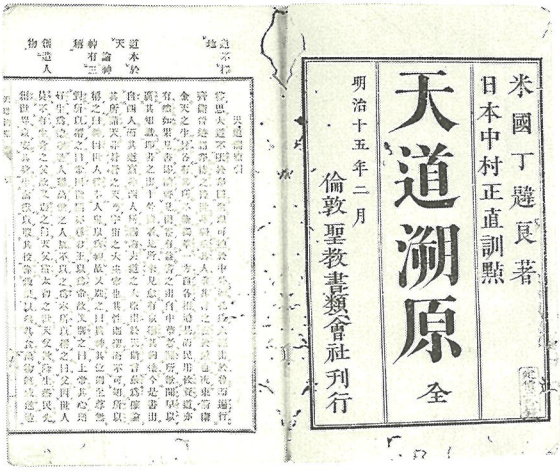
山本覚馬
――その会津人たちに与えた影響――

内海健寿

『会津大事典』（国書刊行会　一九八五年）に、山本覚馬について筆者はこう記した。

山本覚馬　やまもとかくま　文政一一年―明治二五年（一八二八～一八九二）。京都府顧問、教育者。兵学をもって会津藩主松平氏に代々仕えた山本家の権八の長男として若松城下に生まれる。初め義衛と称し、後良晴と改める。日新館に入り弓馬槍刀の師伝を得、江戸に出て佐久間象山・勝海舟を訪ね、洋式砲術を研究。会津藩蘭学所を設置、軍事取調兼大砲頭取となり、会津軍近代化に功があった。京都では公武合体を説いたが、慶応三年（一八六七）鳥羽伏見の戦いで捕えられ、薩摩屋敷に幽閉された。獄中起

草の『管見』と題する経世論が、薩摩藩要人の眼にとまり釈放された。進歩主義の政治家覚馬は、戊辰戦争と牢獄の試錬に耐え、失明と脊髄損傷の二重の障害の苦悩を克服し、京都府顧問、京都府議会初代議長、京都商工会議所会頭となり、殖産興業に貢献した。彼の教育・文化・医療・産業・経済の諸事業の発想の根底には、非戦・平和・人道・福祉の思想がみらる。アメリカ宣教医ゴルドンから贈られた『天道溯原』を読み共感し、キリスト教こそ日本人の心を磨き、進歩を促進する力となると悟った覚馬は、新島襄の同志社設立に協力、所有地（旧薩摩藩邸跡）を学校敷地として譲った。同志社の卒業式に「貧民の友たれ」と述べ、「能く弱を助け、強を挫き、貧を救い富を抑ゆるものは誰ぞ」と、キリスト教信仰に基づく博愛・人道の戦士となることを奨めた。


米國丁韙良著
日本中村正直訓點
天道溯原 全
明治十五年二月
倫敦聖教書類會社刊行

山本覚馬が読んだ『天道溯原』（但し上記写真の『天道溯原』は、明治15年３月刊行のもの）

山本覚馬と井深梶之助

明治学院の井深梶之助は、会津の先輩で、二六歳年上の同志社の山本覚馬から、日本の将来の徳育はキスト教倫理を基礎とすべきことを教えられたのである。明治初期に新日本の建設を使命とした東西二つのキリスト教主義学校、すなわち、東京の明治学院と京都の同志社の創設において、重要な働きをなした人物は、奇しくも共に会津人であった。山本覚馬と井深梶之助がそれである。

井深梶之助について、筆者は『会津大事典』にこう記した。

井深梶之助　いぶかかじのすけ　安政元年―昭和

一五年（一八五四―一九四〇）。会津藩校日新館の学頭井深宅右衛門の長男として会津若松の城下に生まれた。母は家老西郷頼母近思の娘八代子。アメリカ宣教師ブラウンとの出会い、その人格的感化によって、キリシタン禁制解除前に洗礼を受けた。のちニューヨーク・ユニオン神学校に学び、帰国後ヘボンのあとをうけて、明治学院の総理に就任、国際会議などで活躍した。アメリカで神学博士号を取得。君公松平容保の恭順によって助けられた身として、井深は自らも救済事業に一生を献げた。また知育偏重の弊を改め、意志と情操の教育を尊重し有能な技術者や博識の学者のみでなく、宗教的かつ円満な人格形成を力説した。第二次大戦の危機が迫っていたとき、勇敢にも世界人類同胞主義を訴えた。

井深梶之助の活動はプロテスタント宣教史、キリスト教教育史およびキリスト教青年会を通じての国際的運動という三つの領域にわたってゆたかに展開された。

井深梶之助は、先輩山本覚馬との出会いにおいてキリスト教倫理の重要性を示唆された会談を次のように回顧して語った。

明治十何年であったか、一日山本覚馬氏の寓居を突然訪れたところ、同郷の好みをもって心地よく面会して、よもやまのことを話出された中で、とくに日本の徳育は将来どうしても、キリスト教倫理を基礎とせなければならぬという意見を諄々と開陳せられたことを、いまなお、あざやかに記憶する。旧会津藩主松平容大子が同志社に入学して新島社長の薫陶を受けられたことがあるが、それは山本覚馬翁の意見に起因すると推考すべき理由がある。…藩主が同志社に入学せらるるとき、元会津藩家老職の一人であり、当時なお少年の旧藩主の教養については第一の責任者たる子爵山川浩将軍（東京帝大総長男爵、山川健次郎氏の令兄）より新島社長にあてた自筆の依頼書である。この珍らしき書翰ははからずも、先年勢津姫御慶事の際、旧藩主松平子爵邸において、八重子刀自（新島襄夫人、山本覚馬の妹）より筆者（井深）に手渡しされたのであったが、その文中、旧藩主は未だ弱年の事である故に、宗教上の教養については、とくに先生（新島襄）のご薫陶を仰ぐという意味の文言があった。筆者はこれを一読して成程と首肯する所があった次第である。（傍点は引用者）

山本覚馬が会津の後輩井深梶之助に語った「日本の徳育は将来どうしても、キリスト教倫理を基礎とせなければならぬ」という発言は、現代日本国民に対する根本的な忠告であると考えられる。それは東京大学の名総長矢内原忠雄先生の著書『近代日本における宗教と民主主義』の次の文章を想起させる。

日本国民は明治維新以来、民主主義の思想と制度とを学んできたが、まだ十分これに習熟しているとは言えない。それが皮相浅薄の変貌ではなく徹底した精神的革命であるためには、決して一時的な制度的改革ではなく、宗教（思想）と教育による人間改造が行なわれなければならない。（傍点は引用者、やや筆者の文に直した）

同志社と兼子重光（かねこしげみつ）

個人の人格観念の確立にすぐれて寄与する宗教すなわちキリスト教を、京都同志社において体得し、宗教と教育による人間改造をめざしつつ、会津における民主主義の先駆者として活躍した宣教使、兼子重光（常五郎）の歩んだ道に光をあてよう。

自由民権運動とキリスト教とは、ともに絶対主義的な明治政権に対する根本的批判者として登場した。自由民権運動とキリスト教の昂揚を準備したものは、社会思想史的には、それは陽明学的教養であり、経済史的には、それはマニュファクチュア商品生産の発達によるブルジョア的生産様式の発展であり、両者を支える社会的基盤は、第三階級すなわち市民階級ないし中産階級の台頭であるとみられる。

良心を強調した陽明学は思想運動としてはそれによって倫理を内面化し、天理を人格化して、キリスト教を受け入れるための道すじを準備したのである。

会津喜多方には、江戸時代に陽明学の系統をひく北方藤樹学が滲透し、藩の封建的高率貢租の負課によって経済的にも社会的にも、抑圧されている階級にとっては、宿命を強制する仏教とは異なって、実利的要素をもつ藤樹学は注目され、郷頭や肝煎（きもいり）の階層によって継承された。

会津における自由民権運動とキリスト教の社会経済的基盤は、喜多方における製糸業、絹織物、漆器業、酒造業等のマニュファクチュア商品生産の発達によるブルジョア的社会関係の創出である。

会津自由民権運動の拠点。一八七七年（明治一〇年）、喜多方に結成された愛身社の中核は、旧肝煎すなわち豪農

層であり、開明的中産階級の上層であったとみらる。

耶麻郡喜多方に、当時の喜多方町戸長安瀬敬蔵と、いずれも当地方の旧肝煎で当時の区戸長であった宇田成一、中島友八、遠藤直喜らを中心として結成された愛身社は、会津地方の民権運動の発端をなした…。愛身社も参政準備のための豪農だけの新政治知識の研究団体であり、農村的政社であった。

会津民権運動の発端となった喜多方愛身社結成の中心人物の一人安瀬敬蔵は、河野広中の友人で、喜多方キリスト教演説会に尽力し、キリスト教伝道に積極的に熱意を示した。民権運動はキリスト教に好意をもった。自由民権運動の昂揚とキリスト教の発展とが相並んで生じた。

会津の民権運動の闘士兼子常五郎から牧師兼子重光への転換は、自由民権運動からキリスト教への転換を物語る。

兼子常五郎は、一八八〇年(明治一三年)、栃木県師範学校を卒業し、小学校で教鞭をとっていた正義感の強いヒューマニストであった。彼は福島事件で投獄され、杉山重義の示唆によって、会津の先覚者山本覚馬に拾われ、京都の同志社に学び、自由党の政治活動からまったく足を洗って、熱心なクリスチャンとなり、宣教使兼子重光として新生して、かつての激戦地会津若松教会の牧師に返り咲いたのである。

兼子常五郎は福島事件後、一八八五年(明治一八年)京都に出て同志社英学校に入学した。キリスト教が儒教、仏教よりも勝れた宗教であることを感得し、翌一九年、新島襄より同志社教会で受洗した。伝道者として立つ決心をして翌二〇年同志社神学校に入り、二四年卒業し、彦根教会と岡山県落合教会を経て、一八九五年(明治二八年)若松教会に就任した。

兼子重光は、同志社において何を学んだか。「キリストを信ずることから社会改革の熱情が生み出され、キリストを愛することによって、人心改良の精神が湧き出る」(『新島先生書簡集』続編、学校法人同志社、同志社校友会一九六〇年、八八ページ)ことを体得したにちがいない。

「同志社は科学と実学を重視はしたが、その重要な特色は、世俗をこえて日本の良心となる人々を育てた点にあった」(永井道雄「新島襄全集を推薦する刊行の辞」同朋舎出版、一九八二年)

前記したように、山本覚馬の進言によって同志社に入学し、宗教的教養の薫陶をうけた旧会津藩主松平容大の

会津出身者の会記念撮影
前列中央山本覚馬、上段左兼子重光、二人目新島襄、三人目八重、四人目松平容保会津藩主子息容大

補育役として活躍したのは兼子重光であった。

「多感な容大は長ずるに及んでようやく性奔放不羈となった。父容保はこれを心配し、旧藩主の主だった者とも相談して、補育役に河沼郡勝常村出身の兼子重光を起用した。兼子は新島襄の同志社に入学して牧師となった人で、武士の気骨と人世の機微とを知っているだけに、容大補育役には最適任だったし、この人の云うことはよく聞いたそうである。」（益田晴夫編『会津こぼれ草』一九五二年　二三ページ）

『改訂増補山本覚馬伝』に「会津出身者の会記念撮影」がある。前列中央は山本覚馬先生、上段左は兼子重光氏、二人目は新島襄先生、三人目は八重夫人（夫人は覚馬先生妹）四人目は松平容保会津藩主の子息容大である。覚馬に拾われた兼子は同志社に学び、新島襄から受洗し、松平容大の補育役となる。

会津の宣教使兼子重光は、会津若松教会牧師に就任する二年前の一八九三年（明治二六年）『昼夜祈禱』を公表した。「天地万有の創造者に在まして全知全能なる真神よ。常に万有を保全し特に人類を愛恵したえず真善美の三徳を以て教育を施し給う事を感謝し奉る」に始まる『昼夜

祈禱』において、彼は、人間の霊性と心性と身体の三部を統合した全人的教育を目標としていた。また、彼が、「わが帝国民を始め全世界の人類を救済し給はん事を」と祈るとき、彼の清純な国民主義と、国境を越えたキリスト教世界兄弟主義の雄大な幻がみられる。

同志社出身の会津人看護婦井深八重

山本覚馬は、卒業生たちに「貧民の友たれ」と語って、キリスト教信仰に基づく、博愛、人道の戦士となることをすすめた。「人の心をやわらげ、慈愛にさせるために、人生に悲哀は必要である。本当の悲哀を味わったことのない心では同胞の苦しみ、喜び、希望を身近く感じることはできない。世には、人間らしい親切な心をもって神と人とに対する愛にあふれている人がある」（高野岩三郎大内兵衛訳『マルサス初版人口の原理』岩波文庫二一二―二一三ページ）

会津人の井深八重は、青春時代に人生の悲哀を経験し、同胞の苦しみと希望を身近く感じ、神と人とに対する愛と奉仕の生涯を全うした。『同志社九十年史』はこう記した。「救癩事業に生涯を捧ぐる井深八重子がある。静岡県御殿場の復生病院に奉仕し、かつてナイチンゲール賞を受けて世の注目をひいた。

井深梶之助の弟彦三郎は、国会議員となり、中国大陸に雄飛し、北京で客死した。彼は旧満州奉天病院の開設に尽力した。彼の一人娘の井深八重はキリスト教博愛主義の実践者となった。井深八重は、どのようにして、また、なぜ神山復生病院看護婦の道を歩んだのであるか。両親を早くからなくした井深八重は、京都の同志社女専（現在の同志社女子大学）英文科を卒業して長崎の女学校の教壇に立った。ところが、ある日、ライと診断され、富士山麓の人里離れた林の中に建つあばら屋同然の病棟に送られた。悲惨な世界に投げ込まれた絶望の底で、井深は当時の院長レゼー神父とのすばらしい出会いを体験した。フランスの貴族の家に生まれ、長崎きりしたん殉教者に感動して司祭となって来日したレゼー師は、この神山復生病院の院長となっていた。「親から離れ、富を捨て、遠い日本で、いちばんいみきらわれていた癩者をわが子のようにいつくしむレゼー翁の姿に、生きる力を与えられたのです。」（「看護婦としてライ者一筋に」井深八重さん朝日社会福祉賞　愛と献身の軌跡（下）『朝日新聞』一九七八年一月六日）

井深八重の病状が一年たっても進行しない、改めて精密検査の結果、ライではない、とわかった。院長は大喜

びで退院していいと励ましてくれたが、井深は、生活をともにした病苦の人々を思い、さらに「日本人のすべてに代わって、レゼー神父のご恩に報いたい」と思い、看護婦として働く決心をした。東京の看護学校に学んで資格をとり、一九二三年神山復生病院初のナースとなった。

「感謝しながら、安らかに、苦しみの生を終える。そんな感動的な死に何度も立ち会いました。」輝き出る人間の心の美しさを井深八重は発見したのである。

阿部志郎氏（横須賀キリスト教社会館館長）は、井深八重の人柄をこう記した。

だれしも井深さんの清冽（せいれつ）な人格に出会えば魅せられたに違いない。井深さんは、人の徳を讃えて、自らを語らぬ人だった。厳しく自己を抑制しながら、病者も訪問者も、わけへだてなくいつもニコニコと温かく包み込み美しく上品な言葉で接した。【み摂理のままにと思い　しのびきぬ　なべてはふかく胸につつみて】（井深八重）（阿部志郎「病者と生死を共に」『キリスト新聞』一九八九年六月二四日）

（福島県立会津短期大学教授）

『会津大事典』国書刊行会　一九八五年
『改訂増補山本覚馬伝』京都ライトハウス（青山霞村原著）刊　一九七六年
『井深梶之助とその時代』明治学院一九七一年
『会津のキリスト教』（内海健寿著、キリスト新聞社　一九八九年）
『福島県史』第一一巻　一九六四年
小林喜成『福島県キリスト教史』『福島県史』第二一巻　一九六七年
『会津喜多方の歴史』（伊藤豊松、石山書店　一九七四年）
拙稿「井深八重の出会いと決心」（『蛙柳』第五〇号白河　一九八九年八月一〇日）
拙稿「井深八重の人間形成とその感化力」（『蛙柳』第五一号　一九八九年九月一〇日）

故郷喪失者の近代
――山本覚馬・八重兄妹――

福本武久

日本人にとって〈戦後〉といえば、暗黙のうちに太平洋戦争を起点にしている。けれども会津若松では、いまでも明治元年の戊辰戦争以後をさすのだという。会津藩士であった山本覚馬と妹の八重にとっても、鶴ケ城での籠城戦は終生わすれることができなかった。

覚馬はこの戊辰戦争を京都でむかえている。京都守護職勤番にあったかれは、鳥羽伏見の戦いのときに新政府軍にとらえられ、薩摩藩邸に拘禁されていた。妹の八重は女性でありながら銃砲で籠城戦をたたかいぬいた。

落城とともに故郷を喪失した八重は、のちに兄をたよって京都にやってくるが、覚馬は籠城戦のようすについて、なんども八重にききたがった。

「それから、どうした？　話してくれ」

覚馬は夜になって、ひとたび床についても、むっくり起きあがっては、八重に話のつづきをせがんだという。

郷里をうしなった兄妹にとって、戊辰戦争とは、いったい何だったのか。藩家がたおれてしまい、八重は家屋敷だけでなく父もなくした。さらに最初の良人ともわかれなくてはならなくなった。覚馬はどうであったか。獄中にあったかれは、戦争をやめさせることもできず、だからといって参戦することもできなかった。覚馬はもともと会津藩にあって、数すくない非戦論者であった。公用人として藩主の手足となって奔走していたかれは、つねに「国内では争うべきではない。現在は諸外国の脅威

明治34年鶴ケ城時の軍
装姿をした八重

官軍の会津鶴ケ城攻めのため男装姿で
鶴ケ城へ入城する八重

にそなえるべき時なのだ」と説いていた。覚馬が獄中にありながら薩摩藩主に上申した「時制之儀ニ付拙見申上候書付」のなかに〈弊藩モ私共并両三輩同論（＝薩長との対立回避）申立得共貫徹不仕之始末ニ至リ……〉という一節がある。さらに大政奉還後、幕府側と薩長との緊迫した事態をむかえたときにふれて、〈万事一洗彼此嫌疑氷解仕度奉存候ニ付昨卯年六月私儀赤松小三郎ヲ以テ御藩（＝薩摩）小松氏西郷氏江其段申述候処御同意ニ付幕府監禁エモ申談候得共更ニ取合不申猶夫是奔走周旋罷在候〉とかいている。

覚馬は鳥羽伏見の戦いの直前まで、両勢力の衝突回避に奔走していたのである。それだけに自分のふがいなさをかみしめ、故郷会津藩の悲惨な結末にふかく心をいためていたのであろう。そういう原体験が京都に骨を埋めた覚馬と八重の半生を決定づけたとおもわれる。

覚馬と八重の兄妹は会津若松城下の武家屋敷でうまれている。覚馬は一八二八（文政一一）年一月、八重は一八四五（弘化二）年一一月うまれだというから、一七歳のひらきがあった。（父は権八、母は佐久）。山本家は砲術師範をつとめ禄高は一五〇石、中級藩士の家柄というところである。

満八歳で藩校日新館にはいった覚馬は、武術で頭角をあらわし、二五歳になった一八五三年（嘉永六）年夏、えらばれて江戸遊学にでた。木挽町で砲術教授の看板をかかげていた佐久間象山の塾に入門、西洋式砲術と蘭学をまなんでいる。象山塾の門弟名簿「及門録」によると、覚馬の入塾は嘉永三年である。同年には勝麟太郎、津田真道が名をつらね、武田斐三郎とならんで覚馬の名がしるされているが、覚馬がこの年に江戸にくだったという記録はない。おそらく象山が会津にやってきたときに将来の入門をみとめてもらい、束脩（入門料）を支払っておいたのだろう。

象山塾は幕末・明治に活躍した優秀な人材を輩出している。「及門録」をみると、嘉永四年には小林虎三郎、吉田寅次郎（松陰）、宮部鼎蔵、五年には河合継之助、加藤弘之、六年には坂本龍馬、七年には橋本左内、真木和泉の名がある。覚馬はこれら他藩からえらばれた精鋭にまじって、砲術はもちろん蘭書の訳本『三兵答古知機』によって西洋の軍制、さらに西洋事情をまなんだのであった。同門の勝海舟が赤阪田町でひらいた塾にも出入りしていたようである。

一八五六（安政三）年会津にかえると、日新館に蘭学所を設置、みずから教授人となった。覚馬は語学としての蘭学をまなんだわけではないが、翻訳書で蘭学の精神を

習得していた。西洋式の砲術、さらに象山直伝の西洋情勢などの指導にあたったのであった。西洋式の銃砲による藩の兵制改革にも成果をあげ、軍事取調役兼大砲頭取になった。たちまち会津藩の若きリーダーとなるにいたる思想形成の足どりは、覚馬が一八六三（文久三）年、藩主に提出した海防意見書「守四門両戸之策」にみることができる。

海国日本は海防を充実させて、諸外国の侵略にそなえなければならない……と、覚馬は主張している。日本の海岸線はひろいが、外国艦隊の瀬戸内海侵入を想定した四門（下関海峡・豊後水道・鳴門海峡・紀淡海峡）と、両戸（伊勢湾と江戸湾周辺）に重点をしぼればいいという。砲台をつくるよりも大砲を搭載した蒸気船の戦艦によるべきだというのが、この意見書の特徴である。移動にとぼしい砲台よりも、自由にうごきまわれる戦艦を重視している。費用は地区ごとの大名の禄高をベースにして比例配分したらいい……とのべ、具体的に計算までしてみせる。四門両戸の地形までを分析、蒸気船や大砲の必要数、費用の捻出や負担方法まで克明に計算している。まるで企業の経営計画書をみるようで、経済的センスゆたかな覚馬の資質がうかがえる。

当時の武士といえば数字にくらかったが、覚馬はちがっていた。それは師佐久間象山の影響である。西洋の兵学が数学を基礎にしていることに着目した象山は、詳証術（数学）はすべての学問の出発点であるとまで言いきっていた。その象山は一八四二（天保一三）年に上申した意見書「海防八策」で、すでに洋式大砲と鋼鉄の軍艦による強力な海軍の編成を提言していた。幕臣勝海舟、肥後藩士の横井小楠もまた幕府は諸侯とともに協力して海軍をつくるべきだと主張していた。幕府の政治総裁職についていた松平慶永のブレーンだった横井は、幕府と諸藩が石高に応じて負担する〈課金〉で海軍を建設すべきであると説いていた。覚馬の海防意見書は、かれが三傑としてあがめる象山、小楠、海舟の持論をさらに発展させたものだといえるのである。

妹の八重は、そういう覚馬をみてそだった。満一〇歳のときから七年間、いわば人間形成期にあたる。多感な一時期ゆえに、兄からうけた影響はおおきかった。もともと八重は男まさりの気質にうまれついている。覚馬から洋式小銃や大砲の操作をならい、白虎隊の隊士に操縦法をおしえるほどになってゆく。そしてあの戊辰戦争では火の女となる。洋式銃をもって入城、髪をたって男装して大砲隊の指揮までとるようになるのである。女性が手にする兵器である薙刀には眼もくれず、西洋式の新鋭

銃や大砲をえらんだ。すでにして近代女性としてうまれかわる素質をもっていたといえる。

一八六四（元治元）年、三六歳になった覚馬は、京都守護職についていた藩主松平容保によびよせられた。二月に京都に出発したかれは、ふたたび故郷にはもどらなかった。

同年七月の禁門の変では、みずからが調練した大砲隊をひきいて長州勢を撃退した。その功により公用人となったが、武人として致命的な眼のやまいにとりつかれた。一八六五（慶応元）年、覚馬は遊学生を引率して長崎にくだっているが、眼科の名医である蘭医ボードインの手術をうけるというもくろみもあった。覚馬の眼疾はもはや最近の西洋医学でもどうにもならないほど重症だった。けれどもこのときの長崎遊学によって、おおくの外国人と知り合った。その豊富な人脈が海外事情の情報源となり、おおきな財産となってゆくのだった。

眼をやんでからの覚馬は、〈武〉のひとから〈文〉のひとに変貌してゆく。公用人として藩主の助言者をつとめながら、洋学研究にもみがきをかけた。砲術や兵法だけでなく、政治、経済、文化の諸制度にいたるまで、諸外国のありかたにまなんでいたのである。

一八六八（慶応四）年一月の鳥羽伏見の戦いで、幕府軍の残党としてとらわれた覚馬は、一年あまり薩摩藩邸に拘禁されている。かれが獄中にいるあいだに新政府軍は江戸城を手中にして、故郷の会津にせめのぼる。そういう悶々とした日々のなかで、覚馬は私憤をすてて、「管見」という口述の意見書をかいて薩摩藩主に提出した。あたらしい日本のグランドデザインをえがいた建白書である。

「管見」は日本をとりまく国際情勢を念頭において、諸制度をどのように改革すべきかをのべている。諸外国はかならず日本の国情を混乱させて、攻めこんでくるだろう。だから確固不変の国家方針をつくって、富国強兵を実現しなければならない。そういう理念を前提にして二二項目の新しい文明制度を提言している。政治、経済、産業、文化、教育とひろい範囲にわたっているが、体系づけられないまま項目の羅列におわっている。まとまりを欠いたのは口述のせいだろう。

覚馬にとって〈富国〉とは、商工業を中心に産業をおこすことであった。産業振興を軸にして各項目を整理すると、商工業の振興をのべる「建国術」、基幹産業ともいうべき製鉄の育成を説く「製鉄法」という項目が頂点に位置づけられる。産業の発展をささえるには、金本位制などをかかげる「貨幣」の制度が必要になり、さらに「港

制」や貿易振興のための損害保険制度を提唱する「商律」などが整備されなければならない。産業界に有能な人材をおくりだすためには「学校」制度の充実、女子教育の重要性を説く「女学」の制度も強化すべきである。勉学にも労働にも生活の改善が必要だという観点から、「衣食」の項では、肉食の奨励と毛織物衣料の着用をあげている。そして三権分立の思想をかかげる「政体」、議会を二院制にすべきだという「議事院」、平等な遺産相続を説く「平均法」など、民主主義的な思想にうらづけられた項目は、あたらしい国づくりの基礎条件として位置づけられる。

覚馬が「管見」にたくした思想は、〈あたらしい国づくりには、封建領主のような強大な権力をもった独裁者によらず、国民をあげてのぞまねばならない〉ということだろう。それは勝海舟をして幕末・維新の最高の思想家といわせた横井小楠の思想とほとんどかわるところがない。国家は〈私〉の政治ではなく、国家と国民の利益を優先させる〈公〉の政治を背景にして、〈富国〉の政策をすすめなければならないというのが、横井小楠の思想であった。このようにかんがえると「管見」は、覚馬が佐久間象山からまなんだ〈世界のなかの日本〉という認識、勝海舟の持論であった〈産業振興と貿易の奨励〉、横井小楠の〈公共の政〉の理論などを具体的に展開したものだとみることができる。

覚馬にとって「管見」は、あたらしい国づくりの原理・原則であったが、みずからが明治の世をいきる原理・原則にもなっていった。一八六九(明治二)年夏に拘禁をとかれた覚馬は、翌年に京都府顧問にむかえられ、ただちに維新でさびれてゆく京都の〈都市おこし〉にとりかかる。権大参事(のちに二代目知事となる)槇村正直のブレーンとして、かれは持てる学識をいかしきった。

京都府は一八七一(明治四)年から、本格的に西洋式技術による殖産を展開、明治一〇年前後には日本一の産業都市になった。経営センスにめぐまれた覚馬は、事業計画のプランナーとしての役割をはたしたのだった。教育制度や社会資本の充実も実現された。日本最初の小学校、中学校、女学校が京都にうまれたのも「管見」によるものだった。療病院、癲狂院(日本最初の精神病院)、駆黴院、化芥所(塵埃処理場)なども「管見」でしめされた提言にもとづいていた。このようにして京都府は全国にさきがけて産業、教育、社会、文化の面で近代化を実現したのであった。

明治中期までの日本のなかで、都市とよべるものは京都しかなかったといってもいい。京都はあらゆるいみで

日本一の近代都市だった。新政府がつくった東京とは異なる方法で〈都市おこし〉を実現したのである。覚馬がなぜそれほどまでに京都の再興に心血をそそいだのか。それは〈反中央〉意識によるものだろう。覚馬は維新政府をつくった薩長の人間ではない。奸賊といわれた会津藩士であった。それゆえ中央政府のめざすものとは異なる道をあゆんだ。あくまで薩長中心の新政府におもねることなく、ひろく世界に眼をむけた原理・原則で第二の故郷である京都の再興に全力をあげたのである。

新島襄をバックアップして、同志社を京都につくったのも、そういう精神のありかたと無関係ではないだろう。維新の動乱をうまくかいくぐってアメリカにわたった新島も、維新政府というものを、まったく信用していなかった。二人のむすびつきは当然のなりゆきというものである。同志社英学校は一八七五（明治八）年一一月に開校した。覚馬と新島が出会ってから、わずか七カ月後であった。中央政府のつくった官立大学のように、エリート官僚の養成でなく、「一国の良心」となる人材の育成をめざすというのが、同志社にたくした新島のねらいであった。覚馬がそれに共鳴したのは、やはり薩長にやぶれた会津藩士だったからだとおもう。

八重は、そういう兄が後援する新島襄と結婚することになる。一八七一（明治四）年秋に母の佐久、覚馬のひとり娘みねと京都にやってきた八重は、故郷をにげだしてきたにひとしかったが、過去にとじこもるような女性ではなかった。銃と大砲でたたかった籠城戦のくるしみをバネにして、積極的に自分の人生をきりひらいてゆこうとした。そういう自我のつよい女性だった。八重は女紅場（日本最初の女学校）の教師をつとめながら英語をまなび、宣教師ゴードンから聖書をまなびはじめる。キリスト教に接近していったのは、やはり悲惨な落城を経験したからだろう。

結婚時の新島襄、八重

一八七五（明治八）年一〇月、八重は新島襄と婚約、翌年一月二日、京都で洗礼をうけた最初の人となり、一月

三日に結婚式をあげた。当時の京都人の眼には〈ヤソ〉といわれる得体のしれない男としか映らなかった新島との結婚である。自立心にとんでいた八重ならばこその勇断であったとおもわれる。結婚後の八重は周囲からしろい眼をあびても、ひるまなかった。西洋式の模範的なクリスチャン家庭をつくろうとする新島襄の思想をうけいれ、同志社女学校が開設されると、みずから教師をつとめた。

時代の変革期にひっそり登場した偉大な先覚者、それが山本覚馬であり、八重は近代女性の先駆者というべきであろう。

いくどとなく八重は会津籠城のようすをかたり、兄の覚馬はしずかに聞きいっていた。けれども、ふたりは過去の怨念ばかりにとらわれていたわけではない。

未来を的確にイメージできる者だけが、過去を鮮明にとらえることができる。覚馬と八重はともに〈現在〉を自分の力できりひらくために、まず故郷会津の滅亡を直視して、そこから〈未来〉にむかって積極的に働きかけていたのであろう。この兄妹の〈戦後〉の生きざまが、それをよくものがたっている。

（作家）

『創設期の同志社
——卒業生たちの回想録—』

初期の同志社を語るときの文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名である。

勧める理由は、読みやすくて、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざっくばらんに在学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものだからである。

彼らはいと楽しげに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るのである。すべてが生き生きとしている。

面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。

だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

頒価一、五〇〇円

発　行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課

（〇七五）—二五一—三〇三七・八

モダン・レディー新島八重

河野仁昭

1

新島八重夫人のことで有名なのは、なんといっても戊辰戦争の際の男まさりの奮戦であり、ついで、京都で最初に洗礼を受けたことであろう。篤志看護婦として、日清・日露両戦争に若い看護婦を率いて傷病兵の看護にあたったこともあげるべきかも知れない。これらのことはあまりに有名だから、ことさらふれることもあるまい。

クリスチャン・レディーであった彼女はまた、モダン・レディーでもあった。京都で最初にキリスト教の洗礼を受け、因襲にとらわれることなく、京都では初めてのキリスト教の式による結婚式を挙げたというそのことが、

相手が十年間にわたって外国生活をしてきたキリスト教徒新島襄であったとはいうものの、すでにモダンであった。

八重のモダンぶりは外見にも及んでいた。明治十年代の後半だが、同志社英学校に学んだ湯浅一郎は、後年次のように回想して語っている。（『創設期の同志社』）

新島夫人が、立派な洋装に靴を履いて、時計をかけ指輪を嵌めて、恰度今日の貴婦人の様子をして居たが、当時は非常に突飛な風であった。然し先生と立ち並んで、立派な風采の夫婦だと思った。

湯浅はまた、帰省するときや正月に挨拶に行くと、西洋料理を馳走になったが、キャベージマキ、オムレツ、ビフテキ等の様な、今日では余り結構でないものを悦んで食べた。チースは不味ものだと思って食べ無かったら、是は西洋料理を食べる時は必ず食べなければなら無いものだと〔新島〕先生から言はれた。

とも語っている。常にそうであったかどうかはともかく、新島夫妻は洋食を食べていたのであり、その料理は八重がつくった。女学校時代に、よく手づくりの洋菓子をご馳走になったという女性の証言もある。

料理の作り方は新島から教えられることもあったであろうし（新島は八重あての手紙にも料理について書いている）、親しい宣教師夫人たちから学ぶこともあったにちがいない。

新島の両親は別棟で、食生活もおそらく別であったろう。夫婦単位での生活だった。これも父権が絶対的であった当時としては珍しい。

八重のモダンぶりは、半ば生得的なものがあったのではないかと思われる。新島に出会う前からそういう面があったのは確かである。

明治八年三月七日付の、大阪川口の居留地から安中の父民治に送った手紙で、新島は結婚相手について次のように伝えた。

乍然此分ニ而参候ヘハ日本国中をさがしても小子の意ニ応ずる者ハ有まじと心配いたし居候、小子ハ決し而顔面の好美を不好、唯心の好き者ニし而学問のある者を望み申候、日本の婦人の如きなき女子と生涯共ニする事ハ一切好ましく不存候

新島は男尊女卑の封建社会で躾られた女性と結婚する意思はなかったのである。八重の『回想録』によると、槇村正直大参事から結婚についてたずねられた新島は、外国人は生活レベルが違うから日本の女性をめとりたいと思うが、「亭主が、東を向けと命令すれば、三年でも東を向いている東洋風の婦人はご免です」とこたえたのだという。すると槇村は、それなら山本覚馬氏の妹で、「今女紅場に奉職している女」がちょうどいいと勧めたというのである。

婚約したのは明治八年十月十五日であった。八重はクリスチャンである新島と婚約したために新英学校女紅場を解雇されているから、『回想録』にいうように、槇村が新島に八重を勧めたかどうかは疑わしい。ただし、新島が槇村に初めて会った明治八年四月上旬には、京都にキリスト教主義の英学校をつくるという構想は新島にはなく、槇村から博物館用掛を委嘱されているほどだから、八重の話が槇村から出ることはありうるだろう。槇村は八重について、彼女は女紅場に勤めている関係で、「度々私のところへ来るが、その都度、学校の事について、いろいろむつかしい問題を出して、私を困らせている」と語ったと、右の『回想録』にある。新島に初めて会ったころ、八重は京都博覧会を見物に来て木屋町の宿に滞在していたM・L・ゴードンのもとへ、聖書を学びに行ったりしていた。そのゴードンの川口居留地の家に、新島は同居していたのである。

結婚当時の新島夫妻—八重の帽子と時計の鎖が目につく

八重と婚約した新島は、「アメリカの友人たちに」そのことを報告して次のように書いたと、A・S・ハーディーはその編著『新島襄の生涯と手紙』(北垣宗治訳『新島襄全集』第十巻)に引用している。「友人たち」というのはA・ハーディーを含めてのことであろう。

彼女は盲人である兄上にいくらか似ていて、自分の義務を確信しているときには何ぴとたりとも恐れま

せん。彼女は同僚たちがそうすることをこわがっていた時には、学校のためにしばしば知事に会いに行きました。クリスチャンになってからは時々生徒たちにむかってキリスト教の真理について語りました。今では彼女は知事によって解雇されていますが、それは生徒たちが彼女を通してキリスト教を学び、そのため親たちが生徒に学校をやめさせてしまいはしないかと知事が恐れたためです。

八重がクリスチャンになるのは明治八年一月二日にJ・D・デイヴィスから洗礼を受けたときと考えるべきだろうが、前年四月ころにはゴードンから聖書を学んでいるので、そのころからだと解釈できなくはない。それはともかく、新島が、彼女はキリスト教徒であり、また、知事をもこわがらないで、主張すべきことは主張する女性であることを強調している点に注意をひかれる。まさに、当時の日本の女性らしくない女性だったわけである。民治あての手紙に書いた条件にかなっている。しかも彼女は、女紅場で教導補を務めていただけでなく、ゴードンにも積極的に学んでいる。当時としては「学問のある」女性であった。

2

新島と結婚した八重は、A・スタークウェザーと協力して、明治十年に同志社女学校の前身である女紅場を開校する。その第一回卒業式は明治十五年六月におこなわれ、高松仙、原ともら五名を送り出すことになるのだが、新島はその式に臨んで、次のような言葉を餞にしている。とはいっても、その祝辞は紙片に赤インキで断片的に走り書きしたメモなのだが、祝辞の骨格の部分は看取し得るといってよいだろう。

新島はメモの冒頭の上辺に、Silent influence of Women と書いている。これが祝辞の主題だとみてよい。メモには、次のような言葉の断片がみられる。

シーレノ妻　顔ニ喜ト望ヲ含メリ、不言シテ克人道ヲ記シ、不働シテ克（マ）ハ人ヲ銘（マ）々勤ム

「不働シテ」以下の文意は不明瞭だが、「シーレノ妻」というのは、アーモスト大学のJ・H・シーリー教授（のち総長）夫人であることは間違いない。次のような言葉もメモに記されているのである。

書生ノ失望シタルトキハシーレ先生ノ妻ニ行キ慰メヲ受ケ、家郷ヲ思ノ情ヲ忘ル／言寡ナ〔ク〕シテ克ク言ヒ、多〔ク〕働キテ之ヲ人ニ言ワズ

新島はアーモスト大学に存学中、休暇中や病気のときしばしばシーリー家に宿泊して世話を受けた。そのときのシーリー夫人の印象を語ることによって、卒業生への餞としたものとみてよい。

シーリー夫人は言葉の少ない人であり、多くの働きをしてもそれを人に言わなかった。しかし、言わないことは「克ク言」うことであり、「陰〔隠れ〕テ顕レザルハナシ」と新島はつけ加えている。さらに、「兎角婦人ガ多語ヲ用ヒ大事ヲ破ル／婦人ハ物ヲ言テ事ヲ為スヨリ、黙シテ事ヲ為スニ事ガ多ク功ヲ奏スベシ」とも記している。彼はまた「一言尚貴千金、万語尚却卑如瓦石」「真鍮ノ光ヲ発スルト、ダ〔ヒ〕ヤモンド真珠ノ光ヲ発〔ス〕ト大ニ異ナル所アリ」とも書き添えており、モメの終りに、エマーソンの言葉を英語のまま引用している。それは、書物は多く持つよりも、よい数冊の本を徹底的にマスターした方がよい。余り多くのことをやるよりも、やろうとすることは徹底してやった方がよい、という意味の文章である。

新島は、女性の多言を戒め、寡言もしくは黙することの感化力を説いたわけで、年代は不確かだが、女学校の卒業生に贈る言葉を記した別のメモ（多分明治十五年）には、次のように書いている。

人縦令多分ノ言葉ヲ費ヤサ〔ザ〕ルモ徳ノ力尽ク人ヲ服セシメ徳力克ク人ヲ化スベシ、若シ此徳ヲ欠キ、此徳ナキトハ、如何ニ学力アリ智識アルモ多クハ己レヲ益スルノミニ止マリ、社会ヲ益シ人ヲ益スル事ハ期セラレザルベシ

新島襄が九年間のニューイングランドでの勉学時代に、家庭および家庭における主婦はどういうものかを直接接して学んだのは、右のJ・H・シーリー家とその夫人、A・ハーディー家とスーザン夫人、そしてヒドウン家で同宿したE・フリント夫妻などではなかったかと思う。親しく接した女性では、最初の新島伝 *A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima* (1890) の著者、P・F・マッキーンをあげることができる。

以上にとどまらないであろうが、これらの女性たちから新島は近代の女性はいかなるものかを学んだのである。そのことが、八重を結婚相手として選ばしめたとい

ってよい。八重は新島が九年間におよぶニューイングランド生活によって形成するに到っていた女性像に近かかったのだ。もし八重に出会うことがなかったら、先にあげた父民治あての手紙にもあるように、彼の結婚はもっと遅れていたに違いない。

それにしても、九年間におよぶニューイングランドでの生活の中で、近代的な女性についてさまざまなことを学んだはずの新島は、同志社女学校の第一回卒業式の席で、シーリー夫人をひきあいに出して、なぜ女性の寡言の美徳のみを語ったのか。もちろん限られた時間内でのスピーチだから、あれもこれもというわけにはいかない。そのことを考慮においてもなおかつ、わたしにはそのテーマの選択が気にかかるのだ。新島は封建的な因襲が強い日本の社会における近代的な女性のあり方が気がかりだったのではないか。

3

わたしがこういう想像をするのも、一つには新島が晩年、大磯から八重に送った手紙(明治二十三年一月四日付)に、次のように記されているからである。

昨日も一筆申上候通、御前様之関東ニ御出之事ハ考ふれば考ふるほど上出来とは思ハれ不申、西洋風ならともあれ私共は日本人ニして、日本に働きを為す身ニ有之候ハゝ、夫婦之間柄よりも親の御事ハ重んじ申度、殊ニ八十四歳ニも被成候御年寄を寒之最中ニ見捨て関東ニ御越し被下候共、御前様ニも不安心、又私ニも心に甚快からず、若しもの事有之候節ハ実ニ御互ニ残念、又世間にも申訳なき次第、又如何ニも情として忍び難き所あり

旅先の旅館で病の床に臥せて不自由している新島のそばへ行って介護したいという八重を、新島は二度か三度にわたって押しとどめる。右はその一通である。

新島の孝養の念がそういわしめているのはまぎれもない事実である。ただ、八重を説得するにあたって、「西洋風ならともあれ」以下「親の御事ハ重んじ申度」の一節と、最後の「又世間にも申訳なき次第」といった言葉に、わたしは意外の感を受けるのである。近代的な新島夫人になりきっていたとはいえ、二十歳すぎまで会津若松で武家の娘として躾られたであろう八重を説得する言葉としては、それがもっとも効果的な言葉であったかも知れない。それにしても、「私共は日本人ニして、日本に働き

を為す身」なのだから、「夫婦之間柄よりも親の御事ハ重んじ申度」というのは、ほとんど新島の言葉とは信じがたい気さえするほどである。新島は孝養を重んじる人であったから、八重にはそうしたことを平素から言っていたのかも知れない。

唐突なようだが、わたしには、知事にも言うべきことははっきり言う近代的女性である八重の、日本の社会、それも京都での立居振舞いに対して、新島は結婚以来気をつかってきていたのではないかという気がする。キリスト教会の会員たちや男女両校の生徒たちとの関係はともかく、八重の近所づきあいや、町の人々との交際については明らかにすべき記録がない。ただ、明治十九年二月二十日付の新島公義あての手紙に新島が、「八重も〔公義という〕けんか相手を失たる只今ハ夫婦差向ヒニテ少しく徒然ニ思ひ候得共、幸ニ多事なる人間故徒然之至ニ不堪之憂ハ無之候」と書いていることや、やはり公義あての明治二十年三月十九日付の手紙の、「八重も近来ハ大分急ハしく候、婦人中之交際繁しく相成申候」といった文面から僅に想像しうるにすぎないのだが、少なくとも明治二十年前後までは、京都市民の一人としては、彼女は孤独な状態にあったのではないか。

クリスチャン・レディーだったことにもよるし、会津という他国からの入り人の一人だったということもある。いま一つ、物怖じしない彼女のモダン・レディーぶりがそれに加わったのである。市中の多くの女性たちにとっては、親交を躊躇せしめものが、おそらく八重にはあったと思われる。

新島夫妻に接することが多かった徳冨蘆花の『黒い眼と茶色の眼』の一節が思い出される。蘆花は和洋折衷姿の八重夫人を描いてから、次のように書いているのだ。

> 飯島〔新島〕先生夫人の評判は学生間には甚よくなかった。一廉の内助のつもりで迎へた夫人が思いの外で、飯島先生の結婚は生涯の失望である、と云ふ事が誰言ふとなく伝へられた。

山本久栄との恋愛の破綻にからんで、蘆花が八重を快く思っていなかった事実は考慮に入れるべきであろう。だが、事実を曲げて書くような作家ではないのである。

日本にはまだ、小学校以上の学校に学んで広い知識や教養を身につけていた女性は、どれほどもいなかった。それらの女性が男尊女卑の気風が強い日本の社会に出ればどういう境遇に置かれることになるか、新島は八重の境遇を通してそのことを熟知していた、あるいは心を痛

めていたのではないか。

女学校を巣だつ女性たちに対して、新島が寡言の美徳を説いたのは、「私共は日本人ニして、日本に働きを為す身」なのだから、いたずらに知識をひけらかすな、自己主張をするな、日本の社会はまだ西洋のようにはなり切っていないのだからという、日本の社会を配慮しての戒めであったように思われる。

初期の神戸女学院の卒業生に、同志社英学校卒業生と結婚した人が多いのも、考えさせられることの一つである。教養を身につけたクリスチャン・レディーにとって、結婚相手は得がたかったのではないか。

先の大磯からの八重あての新島の手紙は、女学校から第一回の卒業生を送り出して七年後に書かれたものである。だが、日本の社会はほとんど変ってはいなかったし、新島もまた考えを改めるべくもなかったにちがいあるまい。

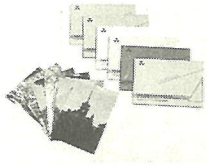
それにしても八重は、新島襄というよき配偶を得たものだと思えてならぬ。

（同志社社史資料室長）

同志社の絵葉書シリーズ発行

茜色の雲に映えるクラーク記念館、淡雪の積もる良心碑、桜花欄満の啓明館（旧図書館）、大文字の送り火を背にする栄光館など、多くの校友・同窓が在学中馴れ親しんだ「今出川キャンパス」の四季折々の風物および「田辺キャンパス」の雄大な建物群を紺碧の空をバックに捕えたものおよび新島先生の肖像画遺墨などを、それぞれ六枚一組にして発行しております。

○重要建築物シリーズ
○新島襄の面影シリーズ
○大学今出川校地シリーズ
○大学田辺校地シリーズ
○女子大学今出川校地シリーズ
○女子大学田辺校地シリーズ
定価各シリーズ六校一組二百五十円



◉購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。
◉代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

発行　同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入
電話（〇七五）―二五一―三〇三七～八